

令和元年6月18日現在

機関番号：12101  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2016～2018  
課題番号：16K02229  
研究課題名（和文）ジャン・シベリウスにおけるナショナリズムの超克

研究課題名（英文）A Deconstruction of Nationalism in Sibelius

## 研究代表者

神部 智（Kambe, Satoru）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：20334005

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ジャン・シベリウス（1865-1957）の創作活動を新たな知見から考察し、西洋音楽史におけるこの作曲家の芸術的業績を適切に位置づけることにある。19世紀後半から20世紀前半にかけての西洋音楽史、およびフィンランドの社会的動向を踏まえ、ナショナリストという従来の極度に単純化されたイメージからシベリウスを解放し、新たな作曲家像の形成を行った。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、フィンランドの作曲家ジャン・シベリウスの生涯や音楽作品に関する従来の誤った情報を修正し、最新のデータに照らし合わせながら、彼の芸術的業績を再評価することにある。わが国では、シベリウス作品の演奏機会が非常に多い。正しい知識に基づいてこの作曲家の音楽を適切に受容するために、学術的な成果を踏まえ、精確な情報を聴き手に提供することが社会的意義といえる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to explore the artistic activity of Jean Sibelius (1865-1957) through new perspectives and to evaluate his works within the history of 20th century music. Taking the contemporary musical trend and the Finnish history into consideration, we can change the stereotyped image of Sibelius as a Finnish nationalist and interpret his artistic achievement properly.

研究分野：音楽学

キーワード：ジャン・シベリウス フィンランド ナショナリズム 西洋音楽史 交響曲 交響詩

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

ジャン・シベリウス (1865 - 1957) は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて活躍したフィンランドの作曲家である。

一般にシベリウスの音楽はその歴史的、社会的文脈から、フィンランドのナショナリズムと関連して論じられることが多い。確かにシベリウスの創作活動は、フィンランドの独立運動 (19 世紀後半から 20 世紀初頭) および国家独立 (1917 年) の時期と大枠で重なる。また、シベリウスが自国の民族叙事詩『カレワラ』(1835/49) を題材とした作品を数多く作曲していることも、彼をナショナリストに位置付けようとする要因の一つとされている。日本においてもシベリウスを「フィンランドの国民楽派」とみなす傾向が未だにある。

その一方、スウェーデン語を母語とし、スウェーデン語系フィンランド人というフィンランドの社会的少数派に属していたシベリウスのパーソナリティはきわめて複雑であり、その音楽も多様な様相を呈していることは指摘されなければならない。作曲家シベリウスの個性はさまざまな要素が絡み合って醸成されたものであり、その音楽もまた、「フィンランドの国民的作曲家」という画一的なイメージだけでは単純に割り切ることのできないものといえる。シベリウスの音楽について論じる際には、ナショナリズムの他に数多くのキーワードが求められるであろう。

そうした見方を背景に、近年の研究ではシベリウスの複雑なパーソナリティ、およびその音楽的特徴と芸術的価値について、一次資料調査、作品分析、美学的・社会的論考、音楽史・演奏史的観点による考察など、さまざまな切り口からアプローチする傾向にある。1990 年より 5 年おきに開催されているシベリウス国際会議では、フィンランド、ノルウェー、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、バルト三国、日本など各国の研究者が活発に発表を行い、シベリウスの音楽について新たな知見を加えるとともに、その芸術的成果を新しい文脈で捉え直そうとしている。

研究代表者は、これまでシベリウスの交響曲と交響詩の考察を中心に、シベリウス国際会議での口頭発表 (第 2 回・第 3 回)、日本音楽学会、美学会、日本音楽表現学会での論文発表 (計 4 本) のほか、ミニチュア・スコア (音楽之友社) “Jean Sibelius's Kullervo and Lemminkäinen: Form, Image and Musical Narrative” (国際記号学会、2005 年) 『シベリウスの交響詩とその時代 神話と音楽をめぐる作曲家の冒険』(音楽之友社、2015 年) 等の著書を発表し、最新の研究成果に基づくシベリウス論を継続的に発表してきた。その過程において、上記をはじめとする学術的成果を学会だけでなく、わが国の社会に広く発信し、シベリウスへの理解を深める必要性について強く認識した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的の一つは、シベリウスの主要作品について一次資料を調査し、これまでとは異なる観点から彼の音楽を再評価することである。それに伴い、初期から晩年期に至るまでのシベリウスの創作活動と美学的姿勢に光を当てながら、シベリウス作品に見出される彼独自の作曲技法、表現手法について論考する。

シベリウスは当時の時代潮流や社会動向とどのように向かい合ったのか、最終的に彼が目指した音楽はどのようなものであったのか。「フィンランド的なもの」、ナショナリズム的要素を乗り越えていくシベリウスの創作活動を主軸にしながら明らかにしていきたい。その際、シベリウスのイメージを「フィンランドの国民的作曲家」という従来のステレオタイプの見方から解放し、作曲家としてのシベリウスの全体像、およびその芸術的業績を多角的な視点から考察する。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて隆盛を極めた国民楽派、あるいは民族主義者と呼ばれる音楽的アイデンティティに依拠せず、より抽象的な表現世界に向かったシベリウスの創作活動全体の考察を通して、新たな作曲家像の形成に結び付けることを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究においてはフィンランドでの資料収集後、それらの整理・調査を進めながら著書、論文の執筆を行った。本研究に関わる主要な成果は、「最新の研究成果を踏まえ、現代にふさわしい作曲家像を描き出すこと」を主眼とする「作曲家・人と作品シリーズ」の一巻として、音楽之友社より刊行された。なお、上記著書の執筆にあたっては、同シリーズのスタイル (生涯篇・作品篇・資料篇) に従っている。

収集対象とされる資料は、シベリウス関連書籍、論文 (特に博士論文)、出版譜のほか、自筆譜、スケッチ、草稿類の一次資料に重点を置いた。一次資料に関しては日本国内で閲覧不可能なため、ヘルシンキ大学、シベリウス・アカデミー、フィンランド国立アルヒーフ、シベリウス博物館等にて調査を行った。最新の文献および一次資料の調査により、これまで公表されてきた二次文献による情報との齟齬を検証しつつ、正確なデータに基づいてシベリウスの創作活動、美学的立場、作曲姿勢、音楽作品について論考した。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、「フィンランドの国民的作曲家」という従来のイメージでは捉えきれない、複雑なパーソナリティを持ったシベリウスの人物像、作曲家像を提示したことである。フィン

ランドの作曲家という自らのアイデンティティに対して、初期創作期のシベリウスは「フィンランド的なもの」を音楽創作に求め、自国の民族叙事詩『カレワラ』を題材とした交響詩の大作(《クレルヴォ》、《レンミンカイネン》)に着手する。しかし円熟期以降のシベリウスは、主に「純粋な」交響曲の創作を通して、より抽象的な表現世界へと向かっていく。そうした創作姿勢の変化はシベリウスの作風の内にも明確に表れている点を指摘し、作品分析によって各時期の様式的特徴の考察を行った。

シベリウスの音楽の根底には「フィンランド的なものを通して普遍的なものへ」、あるいは「民族的なものを通して汎ヨーロッパ的なものへ」という厳しい抽象化のエネルギーを見出すことができるのだが、創作活動におけるその変化は次の各段階にまとめることができる。

(1) ヘルシンキ音楽院における修学期からベルリン、ウィーンへの留学期を経て、交響詩《フィンランディア》と交響曲第1番の創作(いずれも1900年に完成)に至るまでの期間。この期間は支配国ロシアの強硬な政治的弾圧への反発から、フィンランドの独立運動がもっとも高揚していた時期と重なり、文化的ナショナリズムの動向がシベリウスの創作にも無視できない影響を与えた。そうした状況下、シベリウスは《クレルヴォ》(1892年)や《レンミンカイネン》(1896年、後に改訂)等の大規模な交響詩の創作を通して「フィンランド的なもの」を探究し、新たな表現世界を切り開いていく。ロシアに対する挑発的な交響詩《フィンランディア》の創作は、その象徴である。

しかし19世紀末フィンランドの極度に右傾化した社会状況は、シベリウスの創作活動にも深刻な打撃を与え始める。もっぱらナショナリズムというフィルターを通して自分の音楽を受け止めようとするフィンランド国民の過剰な反応に対し、シベリウスは大きな危機感を抱くようになり、タイトルや標題を持たない抽象的な交響曲の創作によって芸術作品の美的自律性を擁護する姿勢を示すようになる点を指摘した。このシベリウスのスタンスは徹底しており、《フィンランディア》と交響曲第1番の創作以降、彼は交響曲と交響詩(あるいは絶対音楽と標題音楽)のコンセプトを明確に区別する態度を取るようになった。

(2) 初期交響曲の作曲から、ヤルヴェンパーへの移住を経て、ラディカルな交響曲第4番(1911年)の創作に至るまでの時期。交響曲第2番(1902年)は歴史的な大成功を収めるが、「明」が「暗」を乗り越えて輝かしく終結する同交響曲の表現世界は、「ロシアの政治的弾圧に対する抗議と希望への道のり」という恣意的解釈をフィンランドの人々にもたらす結果となった。さらにフィンランドの政治的混乱(ブルジョアとプロレタリアートの階級闘争を含む)が続いたため、スウェーデン語系フィンランド人という社会的少数派に帰属していたシベリウスはヘルシンキでの窮屈な生活にピリオドを打ち、新たなインスピレーションを得るべく、家族とともに都会を離れてヤルヴェンパーへと移住する。

大自然の息吹に包まれた環境での創作活動はシベリウスの作風に質的变化をもたらし、重々しいナショナリズムの足枷からも解放されていく。その成果は、より明快で古典的な交響曲第3番(1907年)に見て取れ、同作品の厳しく凝縮された音楽表現は、従来の交響曲の形式的枠組みを大胆に乗り越えている。その代償としてシベリウスは精神的孤立を深めていくが、斬新な作風の交響曲第4番の発表に際しては、聴衆の無理解という困難に直面する。それにもかかわらず、同時期のシベリウスはヨーロッパの新しい芸術動向や音楽潮流に目を向け、さらに厳しく研ぎ澄まされた音楽創作を目指すようになった点を指摘した。

(3) 交響曲第5番(1915年、後に改訂)から後期交響曲、劇付随音楽《テンペスト》(1925年)、交響詩《タピオラ》(1926年)の創作を経て、1920年代末までの時期。第一次世界大戦(1914年)とフィンランド内戦(1918年)は、シベリウスに深刻な経済的打撃を与えたものの、彼の作風に本質的な影響を及ぼすことはなかった。交響曲第5番の創作以降、晩年期のシベリウスは同時代の音楽潮流と冷静に距離を置きながら、自らの芸術を徹底的に突き詰めていく。その最大の成果は後期交響曲と《タピオラ》の表現世界に端的に表れているが、それらの傑出した諸作品により、イギリスやアメリカの才能ある理解者(ヴォーン・ウィリアムズ、アーノルド・バックス、ハワード・ハンソン、サミュエル・バーバー等)を獲得することになる。

この段階において、シベリウスの音楽は抽象化を極め、交響詩《タピオラ》においてさえ、ナラティブな要素をいっさい退けるようになる。交響曲第6番(1923年)と交響曲第7番(1924年)は、それぞれ「ドリア旋法の応用による伝統的な調性の枠組みの超越」と「単一楽章構成による形式デザインの凝縮」を成し遂げ、交響曲史に輝く頂点の一角へと到達している。シベリウスの創作活動全体に鑑みると、上記の成果はナショナリズムの「否定」によってもたらされたのではなく、アイデンティティの模索と普遍性への指向、すなわち初期創作期から彼が徹底的に追求してきた「フィンランド的なもの」(ナショナリズム的要素)の芸術的な「超克」によって達成し得た、と考えるべきである。

(4) 1930年代以降、およそ30年にわたる最晩年の期間。この時期は、ほとんど新作が発表されなくなるため、「シベリウスは作曲に従事しなかった」とみなすのが一般的である。そうした見方に対し、本研究では交響曲第8番(紛失)の創作プロセスと作品像、第8番が失われた理由に着目し、シベリウス最晩年の創作活動に新たな光を投げ掛けた。

1920年代半ばから1930年代にかけて主に手掛けられた交響曲第8番の「紛失」は、シベリウス最晩年の創作活動を理解する上で重要な鍵を握っている。紛失の理由についてはさまざまな推察が行われているが、未だに決定的な要因を見出すことはできない。実験主義を標榜していた20世紀前半のヨーロッパ音楽界にあって、「時代潮流から外れた作曲家の絶望感」、すなわ

ちシベリウスの保守的な作風が第8番の紛失の主な要因と指摘されることもあるが、それはドイツ中心主義的な進歩史観に基づく一面的な認識であり、今後はその美学的・音楽史的な検証が求められる。そもそも時代潮流との様式的乖離をまったく恐れていなかった創作晩年期のシベリウスにとって、ヨーロッパ音楽の主流（ドイツ、フランス等）からの一方的な評価のみでは、正当な理解を得ることができない点を強調した。シベリウスの音楽に対するさまざまな見解を多角的に検証するとともに、各国の研究者や批評家、音楽家、聴衆による評価という総合的な観点からこの作曲家の芸術的業績を紐解き、ひいては新たな視点で20世紀音楽史を記述することが、今後の重要な課題である。

## 5．主な発表論文等

〔図書〕(計2件)

神部智、『シベリウス 交響曲第7番 八長調 作品105』(ミニチュア・スコア)音楽之友社、2019年刊行予定

神部智、『作曲家・人と作品 シベリウス』音楽之友社、2017年、全296頁

〔その他〕(計5件)

神部智、「ジャン・シベリウスの交響曲」、『ソニー・ミュージックレーベルズ』、2018年、16-26

神部智、「フィンランドの大自然と心を通わせた作曲家ジャン・シベリウス」、『ムジカノーヴァ』第49巻第4号、2018年、10-13

神部智、「シベリウス：交響曲第5番」、『モーストリー・クラシック』第244巻、2017年、44

神部智、「ジャン・シベリウス最後のピアノ曲『愛するアイノヘ』」、『モーストリー・クラシック』第243巻、2017年、52

神部智、「シベリウスのピアノ作品」、『ムジカノーヴァ』第47巻第4号、2016年、62-63

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。